

Title	千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて
Sub Title	On the earthenwares excavated from the Shell-mound of Hisakata (久方), Chiba (千葉) Prefecture
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.1 (1965. 6) ,p.103- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて

鈴 木 公 雄

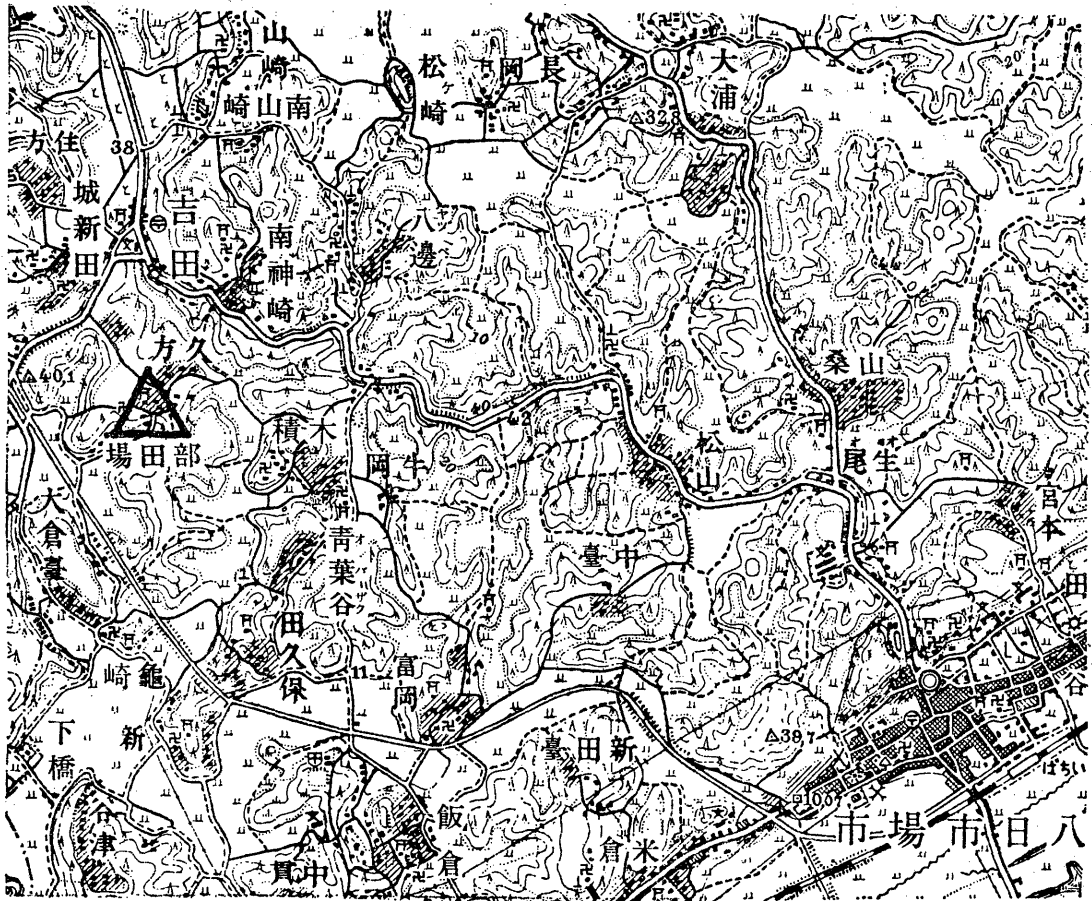
一 序

本塾考古学研究室は、昭和卅九年七月に千葉県栗山川溪谷における考古学的地域調査の一環として、八日市場市吉田地区久方にある久方貝塚の発掘調査を行った。久方貝塚について、我々が調査前に知り得たことは、貝塚は縄文文化中期及後期の二地点からなること、特にその内の後期に属する貝塚は規模は小さいが栗山川地域において類例の少い安行Ⅰ・Ⅱ式の貝塚であること、さらにこの貝塚に接続して縄文文化後期の包含地が存在し、そこから極めて少量であるが晩期前半の土器が採集されていて、調査のいかんによつては後期末から晩期前半にかけての資料が得られる可能性のあること等々であつた。

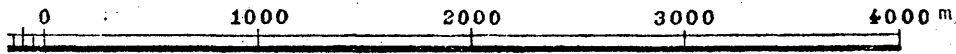
調査の結果、安行Ⅰ・Ⅱ式を出土する貝塚は、耕作による攪乱が著るしく、我々の期待した成果を得るには至らなかつたが、貝塚につらなる包含地遺跡の調査においては、加曾利E式、安行Ⅱ式に至る中・後期全般の資料に加えて、安行Ⅲ式、姥山Ⅱ式、前浦式などの晩期前・中葉の資料もかなりの量で出土し、就中量的には少いが前浦式土器・大洞C₂式土器などとともに、撚糸文の施された粗製深

鉢形土器が出土し、我々の注目を引いた。このように我々が栗山川溪谷の考古学調査としてとりあげた貝塚の調査では、必ずしも十分な成果を得られなかつたが、包含地遺跡より晩期前半の資料がかなりの量で出土し、ここに本貝塚発掘にあつたての目的の一つが達成されたのである。

筆者は千葉県山武郡姥山遺跡の資料を中心に関東地方東南部の晩期縄文土器についていくつかの問題をとりあげて来たが、この久方貝塚の調査によつてさらにいくばくかの資料的蓄積を加えることが出来たことは喜ばしく、又その内容は従来の筆者の晩期土器の研究から予測されていたいくつかの問題に対して、あるていど満足すべき結果を与えるものであつた。このような点と、幸い関東地方晩期縄文式土器の研究が最近とみに活況をているようになり、相ついで報告、論攷が公にされている現状にかんがみ、本貝塚出土の晩期縄文土器に関する報文を用意した次第である。久方貝塚の調査は、先にもふれた如く清水潤三教授の、栗山川溪谷における考古学的調査の一環として行われたものである。本稿はかかる研究の一部に属するものであることを明記すると共に、このような形での個別発表を許されたことに対し深く感謝したい。又この調査は、本塾高等学



尺 之 一 分 万 五



△印 久 方 貝 塚

校歴史研究会が参加して行われた。遺物整理その他で協力下さった園凌然先生を始めとする歴史研究会の諸君又調査に種々御尽力を戴いた八日市場市在住の桜井茂隆氏に対しても深くお礼を申し上げる次第である。

一 遺跡の概要

源を佐原市南部に発する栗山川は、付近の細流を合せつつ南流し、多古町東南方で借当川・多古橋川・高谷川などの有力な支流を合せて、九十九里随一の河川として発達し、横芝・八日市場間の地狭地帯をぬけて九十九里浜に注ぐ。栗山川本流が、多古橋川・借当川と合流する付近は、栗山川溪谷の内でも最も沖積平野の発達した所でもあり、見事な盆地状の水田地帯を作っている。この盆地北端に位置する多古町が、かつて多胡ないし多湖と書かれたことがあると云われることからも知られる如く、今日のこれら水田地帯は、過去において印旛・手賀のような沼湖ないし瀉湖を形成していたと考えられる。そして又そのような地形環境は、石器時代の当地域に於ける生活環境として、重要な役割りを持つていたものとみられる。

久方貝塚はこの盆地東端の、借当川が栗山川本流と合流する付近の左岸に発達した丘陵上にあり、栗山川本流から分岐した一支谷に南面している。付近には宿

井下（縄文前期）⁽²⁾、飯高（同上）⁽³⁾、八辺（縄文中期）⁽⁴⁾、大浦（縄文中・後期）⁽⁵⁾など、借当川の支谷に面する貝塚が存在するが本貝塚のみ栗山川本流に面し、これが立地上の一特色となっている。又栗山川本流の対岸には、牛熊（縄文後期）⁽⁶⁾、木戸台（縄文中期）⁽⁷⁾、後期）⁽⁸⁾、姥山（縄文中・晩期）⁽⁹⁾などの諸貝塚が存在し、中でも久方貝塚とほぼ同一時期の土器を出土する山武姥山遺跡は、直線約六・八キロの所にある。（付図参照）

遺跡は台地上の神社付近に加曾利E式・阿玉台式を出土する貝塚があり（A地点と仮称）神社よりも南の台地斜面に加曾利B式・安行I・II式を出土する小貝塚が存在しており（B地点と仮称）この小貝塚からさらに台地斜面を下った所にかけて存在する遺物包含地

土器型式	個体数	%
加曾利E式	97	9.0
堀の内式	183	16.9
加曾利B式	285	23.8
安行I式	84	7.8
安行II式（第I類）	101	9.3
安行IIIa式（第2類）	21	1.9
姥山II式（第3類）	179	16.4
姥山III式（第4類）	3	0.2
前浦式（第5類）	18	1.7
例外（第6類）	3	0.2
不明	139	12.8
合計	1086	100.0

第1表

※ なお、不明とあるものの内、約3分の2は、いずれに属するかの特徴がとられぬもので、残りは摩耗などによってその文様が不明のものである。

（加曾利E式・前浦式を出土、C地点と仮称）の三ヶ所からなる。筆者等はこの内B地点とC地点の調査を行ったが、本稿においてはC地点出土の遺物を中心にとりあげるのので、次にC地点の概要をのべる。

C地点はB地点の貝塚より比高約三米ほど下降した南斜面にあり宅地化するにあたって台地斜面を切りとり削平したために、包含層の一部はすでに失われたようであるが、幸いにして土器等の遺物はB地点の貝塚よりも多く出土している。層位は極めて単純で、表土、褐色土層、ローム層の三層からなり、C₁・C₃・C₄の各発掘区において部分的にはあるがローム層上に黒色土層の存在が認められた。この内表土及び褐色土層のみに遺物が包含されている。C₁・C₃・C₄

の各区の褐色土層下にある黒色土層は無遺物層である。この様なローム層の直上に無遺物の有機質土層が存在する例は、かつて姥山遺跡の第四次調査で経験したことがある。これは恐らく、ここに遺跡が営まれる以前に、支谷に向つて自然推積した有機質土であろうと思われるのだが、部分的な所見で詳細は不明という他はない。

筆者等は南から北に順に、 C_2 C_1 C_3 C_4 の四つのトレンチ及ピットを設定して調査にあつたが、良好な遺物の包含状態を示したのは C_1 ・ C_2 ・ C_3 の各区で C_4 区ではもはや包含層のはずれとも云うべき状態が観察された。包含層が褐色土層一層であるにもかかわらず出土した土器は、加曾利E式(前浦式)に至る幅広い時期にわたつてゐる。調査中に、各区に於いて土器型式の出土に多少相違がみられたので、整理にあつて第一表に示したように土器型式の個体数を類別集計してみた。この結果後期土器は C_1 ・ C_3 の全区にむらなく出土するが、晚期土器は C_1 ・ C_3 の二区に集中する傾向が認められ、大きくみて晚期土器が、ややせまい範囲に集中的に出土する傾向が知られた。

三 出土土器の分類

C地点出土土器は加曾利式E(前浦式)に至る、中期末(晚期中葉)にかけてかなり幅広いものであるが、本稿では安行Ⅱ式以降の晚期土器をとりあげ、それ以前の土器は一応省略することにした。

第一類(第2図1~18)

(a) 四ないし五単位の大波状口縁の深鉢形土器。口辺各波頂部に

つけられる突起は、所謂魚尾状のもの(第2図1・2)と扇のかなめ状の隆起したもの(第2図3・4)の二者があり、それによつて口辺部の断面形が異なる。口辺部より胴部上半にかけては幅五ミリ程度の隆起した帯縄文による三角文様などが描かれることが多い。又第3図3のようにこの隆起した部分に、縄文でなく細刻によるきざみをつけられる場合もある。(約二十八個体を数える。)

(b)

口辺が直立ないしやや内傾し、胴のややふくらんだ平縁の深鉢形土器。口縁の直下は肥厚しており、そこに带状に縄文が於され、その下に二(三本の隆起した細い帯縄文が横走し、所々に縦長のきざみを入れた突起や所謂豚鼻突起がつけられる。大きさは第1図9に示したような小形もあるが例外的で、多くは口径三十センチをこえるものであろう。

(約廿一個体を数える。)(第2図5~8)

(c)

台付土器と考えられるものを一括した。口縁が第2図17にみられるように外側に突出し、その上に細刻が施される。胴はくの字におれまがるものが多い様で、そこから台脚部との接合部までの間は条線がつけられる。脚部は欠損しているものが多く不明である。文様は第4図23に示したような、矢羽状の沈線文帯をめぐらし所々をすり消したものの他、すり消縄文によるコンパス文などが配されている。約五個体を数える。

(d)

口辺部に指頭による圧痕を施した粘土紐をめぐらす安行Ⅱ式特有の粗製土器。口辺部の断面形からみて、第2図9~11の

ように、口辺が著るしく肥厚し内傾した口辺を持つものと、第2図(14)のように口辺がそれほど肥厚せず、多少内反するようなものの二者が識別される。両者は紐線文の下に配する文様も幾分異なるようで前者にあつては弧状の沈線を引き、その中の条線をすり消すていどであるが、後者では二本の平行沈線を縦ないし斜方向にいくつも引き、その中の条線をすり消すなど、より装飾的である。このような紐線文粗製土器における二つのタイプは山武郡姥山遺跡・多古田遺跡でもほぼ認められるものであり、この地方の一般的な現象として考えられるものである。この二者が同一な型式内における粗製土器の変化にすぎないか否かは、今後の検討にまきたい。約四十五個体を数える。

- (e) 浅鉢形土器に類するものを一括した。第2図15・16に示したものがそれにあたるが、類例は少い。第2図16などは特異な形態のもので、安行Ⅱ式とするよりも、より後出の土器とみることも可能かと思われるが、一応ここに含めて扱つておくことにする。一般に安行Ⅱ式の浅鉢形土器は類例に乏しいようであるが、これは後述する第二類土器との関係からも観察する必要があると思われる。図示したものが全てである。
- (f) 例外的な土器を一括した。第2図18・37に示したものがそれである。第2図18のような土器は、埼玉真福寺貝塚⁽¹⁰⁾・千葉県多古田遺跡・東京都大森貝塚⁽¹¹⁾などからも出土しており、その分布はかなり広いようである。ここにみられる「らせん状

の沈線文」は埼玉真井沼遺跡などの粗製土器につけられる文様に対比し得るものと考えられ⁽¹²⁾、その点これを安行Ⅲ式^a対比の土器とする考え方も出来ると思うが、今は一応安行Ⅱ式の中に含めておく。第2図37の土器は他に比較する実例を知らないが、矢羽状の沈線文が帯状に施される点は、先^(c)の類土器との関係を考えさせるものであり、後述の姥山Ⅱ式^(g)類にみられる矢羽状細密沈線とは区別すべきものとみられる。本例も(安行式とするか同Ⅲ式とするかは、意見の分かれる所と思われる。図示したものが全てである。

以上は安行Ⅱ式土器に相当すると考えられるものであるが、これら第一類土器は、一部の例外的性格の土器を除けば、その文様構成・器形変化等は比較的単純で統一性がある。

- 第二類(第2図19~36)
- (a) 口縁がゆるく低い波状をなす鉢形ないし浅鉢形土器。第2図19~23に示したものがそれにあたる。文様は入組三叉文(第2図19)、ないし三叉文を持つもの(第3図22)や、弧状沈線等によるコンパス文様(第3図22)等のすり消し文様をもつものが多いが、個々の文様の変化がまちまちで、統一性のないことは注目される。これらの内で第2図19~21に示したものを、安行Ⅲ式^a相当とすることは一応異論のない所とみられよう。約六個体を数える。
- (b) 平縁の小形鉢ないし小形浅鉢形土器と考えられるもの。第2図24・26~29・31~34に示したものがこれに相当する。本類

は、口辺断面形からみて、第2図26・27のようなやや外反するものと、第2図24・28・29・31・34のような直線的な器壁を持つものが類別される。文様は口辺部に帯縄文が横走するものが多く、弧状沈線による連続文様(第2図28)ないしすり消し文様(第2図24・29・31・32)を描くものが多いが、第2図29のように、三叉文を持つとみられるものもある。本類も先の(a)と同様に、個々の土器の文様の変化が多様で統一性の少いことは注目される。図示したものがほとんど全部である。

(c)

平縁の小形深鉢形土器と思われるものを一括した。第2図25・35・36に示したものがそれにあたる。口辺が小波状をなすもの(第2図25・35)もみられるが、これはむしろ突起に近いものである。文様は横走する帯縄文がみられ変形された三叉状文などがみられる。第2図36の土器は口辺断面形が肥厚しており、25・35の土器と異なる。本例はむしろ第一類土器の中に含めて考えた方がよいものであるが、一応本類にいれておく。約三個体分を数える。

以上第二類として一括した土器は、その所属時期については問題がある。これらの中のいくつかは安行Ⅲ式土器と認められるが、又そのいくらかはより古い第一類土器(安行Ⅱ式)に關係する疑いの持たれるものであり、両者を明確に分離識別することは困難である。又本類の文様は三叉状文とすり消し縄文を中心とする点は一応一致するが、その文様そのものは個々に変化に富んでおり、第一類

土器及後述する第三類土器のような統一性がすくない点と、器形が全体として小形鉢・ないし小形浅鉢・小形深鉢と云つたものに集中する傾向のみられる点は注目される。このような特徴を持つ第二類土器の性格については後段でふれることにしたい。

第三類(第3図1・32)

(a) 四ないし五単位の大波状口縁を持つ深鉢形土器。第図1・4に示したものがそれにあたる。口辺各波頂部には粘土紐貼付による突起が施され、口縁直下には幅二センチほどの帯縄文がめぐる。波頂部の下には沈線によつて区劃された菱状のすり消し文様がみられ、その内部には沈線による入組文(第3図1・3)や円圈文(第3図2)がみられる。菱状の区劃文が接する部分には区劃内と同様の文様が施される。約九個体分を数える。(第3図4)

(b)

口辺が内傾し胴のやや張つた平縁の深鉢形土器。第3図5・7に示したものがそれにあたる。口辺断面はやや肥厚する傾向を示す。口辺より胴部最大径にかけてが文様帯となり、すり消し帯縄文による二帯の粹状文が描かれる。各粹状文の接する部分には、ボタン状の突起がつけられる場合が多い。(第3図6・7) 胴部以下はここに図示しないが斜方向の条線が施される。本類及び先の(a)類が、共に安行Ⅱ式の伝統を強く引くものであることはいくたびか述べて来た所であるが、改めて第2図8と第3図6の土器を比較して、その両者の關係を觀察されたい。約十三個体分をかぞえる。

(c)

口辺が外に開き、胴がくびれた浅鉢形土器。第1図3・8、第3図16に示したものがそれにあたる。口辺は波状を呈し、その単位は五単位を中心とするものが多いが、中には第1図8にみるような口辺を片口状に二ヶ所えぐりとつたものも存在する。このような例は極めて少い。文様は第1図8、第3図16のように、口辺部に全面斜縄文を施し、胴部に帯縄文がめぐるものが多いが、時には第1図3のような沈線による波頭状の連続文が施される。この文様は第1図6のような平縁の浅鉢にも用いられ、この手の土器のかなり一般的な文様である。約四個体分存在する。

(b)

(c)と同様な形態を持つたものだが、平縁口辺となるものを一括した。第1図6・7、第3図11・13・15に示したものがそれにあたる。文様構成も先述した(c)とほとんど同一のものである。ただ第3図12に示したものは本類に入れるよりむしろ第二類に含めるべきものかも知れない。約十個体分を数える。

(e)

口辺が内傾し多少はり出した胴部とすぼまつた尖底に近い小平底を持つ平縁の粗製深鉢形土器。第1図1・2第3図21・26に示したものがそれにあたる。口辺が内傾して肥厚する傾向のもの(第3図21・23)とそうでないもの(第3図25・26)とがある。口辺は水平に、胴腹部以下は斜方向に条線が於されるのみの簡素な土器である。第3図24のような口辺の肥厚の著るしいものも存在するが、これは本例一例のみである。

(f)

約九十五個体分を数える。
小形の碗形土器。第1図4、第3図31・32に示したものがそれにあたる。口唇上にある間隔を置いて細刻が施される(第3図31・32)他は文様を持たない簡素な土器である。約六個体分を数える。

(g)

口辺が内傾ないし直立する平縁の深鉢形土器である。口唇上に一定の間隔で細刻を施し(第3図8・9)口辺より胴部上半にかけて細密な沈線を施文し、それを沈線によつて長方形ないし半月状に区劃してすり消し文様をえがく。細密な沈線は矢羽状に施文されることもある。(第3図10)約十個体分を数える。

(h)

口辺が直立ないし外反する変形広口壺及び口辺が外に開いた深鉢形土器。第3図17・20・27・28に示したものがそれにあたる。本類は広口壺形の土器(第3図17・20)と深鉢形土器(第3図27・28)の二つの系統がみとめられ、それらを別個に分類する必要があることはすでに述べたことがある。⁽¹⁵⁾本貝塚の広口壺に相当する例は茨城県築地遺跡・千葉県山武郡姥山遺跡のものと比較して胴部のはり出しが弱く、壺として十分発達した形態を備えていない。文様も、口辺部に幅広い帯縄文がめぐる他、特に文様らしいものは施されていない。これに対して深鉢形の形態をとるものは、口辺の帯縄文がせまく、胴部上半に三叉入組文、すり消し文様などが描かれる。第3図28に示したような三叉入組文は、本類(姥山Ⅱ式)に

は時おり散発的にみとめられるが決して一般的に存在するものではない。又第3図29に示したのも一応本類に含めても良いものかも知れない。約二十九個体分を数える。

- (i) 例外的土器を一括した。第3図14・30に示したものがその一部である。第3図14は平縁で胴が多少おれまがる形態の土器とみられるが、浅鉢か深鉢か判断出来ない。又そこに描かれる三角状のすり消し文様は、(a)などにみられるものに類似している。他にこれと同じ様な類例があるか否か筆者には不明である。第3図30は、胴のややくたびれた深鉢形土器と考えられる。胴のくびれ部に列点帯を有するが、その列点は本類(姥山Ⅱ式)に伴うものに類似している。この点と口辺部の粘土紐貼付による小突起からみて、本類に相当するものとして扱つておこうと思う。この他、台付土器の断片と思われるもの等があるが省略する。

以上第三類として一括した土器は姥山Ⅱ式に相当するものである。その内容は、千葉県山武郡姥山遺跡・同多古田遺跡等の姥山Ⅱ式を豊富に出土した遺跡の資料と対比させてみると、ほとんど一致する内容を持つものであることが知られる。姥山Ⅱ式土器を出土する遺跡の分布は、筆者の検討した結果では関東地方東南部に中心をおくものと認められるが、この久方貝塚は、その一例をさらに追加するものである。

第四類(第2図38・第1図10)

第四類土器は姥山Ⅲ式に相当するものを取りあげたが、久方貝塚

では第1図10に示した列点文を有する平縁の浅鉢形土器の他、棒状文を有する平縁の深鉢形土器の小破片が一例と(b)類に相当すると思われる変形壺形土器一例がみとめられたに過ぎない。

第五類(第4図1~21)

- (a) 口辺が肥厚内傾し、胴のふくらんだ深鉢形土器。第4図1~7に示したものがそれにあたる。口辺部付近に太くあらいい左傾する縄文を施し、そこに太い沈線による弧線を上下に引き、その内部をすり消して凸レンズ状の文様を描く。各凸レンズ状のすり消し文様の接する部分に、上下から三叉状のえぐりとりを入れて、一見第4図13のような々字状の裝飾効果をもせるもの(第4図5)もあるが、類例は少い。約九個体分を数える。
- (b) 口辺は内傾せず、直線的な器壁を持つ深鉢形土器。第4図8・9に示したものがそれにあたる。口縁に接して幅二~三センチの帯縄文がめぐるのが特徴的で、それ以下は素文となる。第4図8のように口辺部の帯縄文内に弧線を連らねるものは、やや特異な存在である。又第4図9のものは小形であつて、厳密に言えば類を別にして考えるべきものであるが、出土例が少ないので今はここに含めて考へておく。本類と前述した(a)類が恐らく前浦式土器の中での粗製土器の主体を占めるものであろう。約三個体を数える。
- (c) 口辺が外反し頸部の集約した変形広口壺である。第4図13に示したものがそれにあたる。本(c)類の変形広口壺は、ここに

とりあげた精製のものとより大形の、おそらく姥山Ⅱ式(h)類の伝統を引くと考えられるものの二者が存在することは旧稿において一部指摘しておいた。⁽¹⁶⁾その考えに従うと、第4図13に示したものは小形の精製土器の部類に入る。外反する口辺部に太い沈線によつてx字状のすり消し文様が描かれ、本例では欠損しているが、すり消された内部にすり消し手法による蕨手状の文様が配される場合が多い。又この手の土器の口辺内側には、必ず数本の沈線がめぐり、約二個体分出土。

(d)

口辺が外反し、胴部のややはり出した深鉢形土器。第4図10・11に示したものがそれにあたる。口唇上に二ヶ一組の突起がつけられ、口辺からはり出した胴部までの間に二〜三本の幅二〜三センチの帯縄文がめぐり、その所々にすり消し手法による蕨手文が施される。図示したものはいずれも少片で、その全容を明らかにし難いが、考古学手帖21号にその良好な資料を示しておいたので参照されたい。⁽¹⁷⁾本類も先の(c)類同様外反する口辺の内側に一〜二本の沈線がめぐり、場合が多い。この様な口辺部の内側にめぐり沈線は一般に前浦式土器の特徴の一つとしてとりあげられる傾向があるが、前浦式土器の中にかかる沈線を有するものは本(a)類及(c)類と、ここには存在しないが低い波状口縁の深鉢形土器の三種に特にみられるもので、全ての前浦式土器に通有なものではない。器形上からみると、外反する口辺を持った土器に特に顕著に存在する傾向が指摘しうる。約二個体分がある。

千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて

(e)

本第五類土器に伴う大洞c₂式土器である。第4図15に示したものがそれにあたる。器形は平縁の浅鉢形土器で、口辺部一番上位にある沈線の中には、拓本では不明瞭だが連続する刺突文が施されており、これと胴部付近にわずかに示された雲形文状のすり消し文様は、大洞c₂式の浅鉢形土器に特徴的なものと云えよう。本例は包含地出土々器には珍しい薄いチヨコレート色のうるしがかけられていた。拓本が多少ぼやけたようにみえるのは、そのうるしが剝落して土器の表面があられているからである。本例のような大洞c₂式土器を前浦式土器と一括して扱うことの可否については以前にも触れた所であるが、この点は後段においてさらに詳論したい。図示したものが全てである。

(f)

恐らく本類に伴つたとみられる撚糸文の施された粗製深鉢形土器である。第4図17〜21に示したものがそれにあたる。口辺部破片は第4図17に示した一例のみであるが、それによると平縁で口辺部がおり反し口辺となつていゝものである。第4図21もおそらく同じような口辺部を持つものとみてよいだろう。この点からみると全体の器形は胴部が屈曲せず、砲弾状の深鉢形を呈するものと思われる。これらは、その形態からいつて前浦式に伴つたとしてもおかしくないものである。しかし第4図18や19に示したものは、山武郡姥山遺跡から出土した大洞A式併行期(姥山V式)の粗製土器とその撚糸原体が類似するようでもあり、これらの撚糸文土器が全て前浦

式に伴うものであるか否かは、さらに検討する必要があるが、本遺跡からは姥山V式ないし大洞A式に関係ある精製土器は全く見出されないので、今は一応燃糸文の粗製土器として一括し、前浦式に伴ったものとみておこうと思う。なおこの燃糸文土器と前浦式土器との関係は後段においてのべるが、両者がかなり密接な関係にあることは筆者の予期していた所であつた。口辺部破片は図示した例のみ。

以上第五類として一括したものは、前浦式土器に相当するものであり、本遺跡で最も下降した時期の土器である。出土量は少く、図示したものがほとんど大部分であるが、明確な大洞_{c2}式浅鉢形土器や燃糸文を有する粗製土器などが存在し、その内容は極めて興味深い。

第六類 (第4図22、第1図5・11)

筆者の判断では編年的位置を明確にし得ないものを一括した。第1図11に示した注口土器と第4図22に示した浅鉢形土器の他に、晩期に属すると思われる注口土器の破片(図版の都合上省略した)がそれに相当する。第1図11に示したものは小形の注口土器で、全体に明るい黄褐色を示し所々に煤による黒みを帯びた部分が見られる。作風は小形のわりに器壁があつく丈夫なものである。頸部より上を欠いているが、おそらく外反する幅のせまい口頸部であつたとみられる。頸部直下・胴部及底基部の三ヶ所に三本一組の平行沈線がめぐり、第一・第二の平行沈線間が文様帯となり、やはり三本の沈線による波状文が描かれている。注口部は胴部を形成した後孔

をうがち注口部をはりつけたもので、はめ込み式ではない。このため注口部と胴部にあけられた孔とが多少くいちがっている。本注口土器に類似するものの存在を知らないが、その所属時期は後期とするよりも、むしろ晩期とすべきであろうか。縄文を欠いている所や沈線による波状文は、多少中部ないし東海地方との関係を思わせるが後考にまちなたい。第1図5と第4図22に示した浅鉢形土器は、この注口土器にくらべれば時期の比定はより容易である。焼成は良好で黒味をおびている。大きな弧線による入組文とそれをめぐつて施される彫刻的な三角のえぐりとりからみて、晩期に属することは疑いない。おそらく大洞_{c1}式ないし_{c2}式の影響をつよくうけた土器とみられよう。頸部付近にめぐる突帯は、安行_{III}式の浅鉢形土器にも同じようなものがみられるが、それに比定するよりも、大洞_{c2}式の浅鉢頸部にめぐる突帯との関係を重視すべきであろう。本稿には図示出来なかつた今一つの注口土器破片は広く開いた口頸部と円底を有すると思われるもので、口縁直下にすり消し縄文を伴つた弧線による入組風の文様がわずかにみとめられる。これらの形態・文様からみて、姥山II式か前浦式に伴う注口土器と思われるが、姥山II式も前浦式も共に、それに伴う注口土器が今日明らかでないため、十分な検討が出来ないのは残念である。

四 出土土器に関する二・三の考察

(1) 第二类土器について。
第二类土器を説明したさい、第二类土器の文様が、三叉状入組

文・彫刻的三叉文・弧線状の沈線によるすり消し文様等の特徴としつつも、個々の土器にみられる文様それごとくが個性的で統一性の少いこと、器形があるていど小形土器に集中する傾向のみられること等を、その有する特徴として指摘しておいた。この様な第二類土器が従来の安行Ⅲ式の一部に相当することは、その文様からみて一応妥当な見解といえるが、それを安行Ⅱ式（第一類土器）に後続する土器型式として考えるか否かについては問題がある。筆者は姥山遺跡の晩期土器を概報した際、安行Ⅱ式に後続する土器型式は、いくつかの器形・文様上の伝統からみて、姥山Ⅱ式であると考え、両者の間に三叉文ないし三叉状入組文を持つ土器型式（安行Ⅲ式）が介在することは否定的とみられることを述べた。⁽¹⁸⁾又姥山Ⅱ式そのものの、安行Ⅲ諸型式との対比を行つた際には、それは安行Ⅲ式に比定するよりは従来いわれてきた安行Ⅲ式^bの諸特徴と一致する点が多く、いくつかの未解決の問題を内包しているとしても、姥山Ⅱ式は安行Ⅲ式^bに相当する可能性が最も強いことを述べておいた。⁽¹⁹⁾これらの点から筆者は安行Ⅲ式^aの土器型式としての単独存在には疑問をもつものであり、おそらくそれは安行Ⅱ式の一部に含まれるようなものではないかと考えた訳であるが、それについては、千葉県奈土貝塚・埼玉貝沼遺跡⁽²⁰⁾などの報告例に示唆される所が大きかつた。久方貝塚第二類土器にみられる安行Ⅲ式^a的な色彩を持つたものは

- ① 小形鉢・小形深鉢・浅鉢などの主として小形の土器につけられている。
- ② 三叉文・三叉状入組文といった個々の文様要素は共通し乍ら

千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて

も、それが組合さつて作る一つの文様構成としてはあまり統一性がみられない。

というポジティブな特徴の他に

- ③ それらの文様は、安行系土器全体の器形の流れの中で中核的な存在を示す大波状口縁の深鉢・平縁の帯縄文を持つ深鉢などには認められない。

というネガティブな特徴をも持つものだがこれら①～③のような特徴は、前記の奈土貝塚・井沼遺跡の出土例においてもほぼ共通して認められるようであり、筆者等の調査になるいくつかの遺跡や、最近に明らかにされた千葉県天神前遺跡出土例などにおいても同様にみられる。⁽²²⁾これらの特徴の内特に①及び③の問題をどう捉えるかが安行Ⅲ式^aに対する見解が分かれる重要な点と筆者は考えている。すなわち、安行系土器の中で、その当初から終末近くまで一貫して器形の中核を占めていたものは③に示したような深鉢形土器であつた。それに対し①に示したような小形土器は安行系土器の各型式によつてかなり個性的な動きを示しており、そこに一つの器形の流れ伝統の継続が明瞭でない。もし久方貝塚第二類土器（安行Ⅲ式）を単独で存在する一型式とみとめたならば、その中に③のような安行系土器の中核をなすものが欠除している点をいかに説明したら良いであろうか。もし久方貝塚第二類土器が、単に器形変化の上から深鉢形土器が欠除しているということならば、第2図12～14のような粗製土器・第2図18のような深鉢形土器を加えることによつて、土器型式としての器形変化のつりあいは保持することが出来るかも

知れない。しかしその様な操作のみからは先の安行系土器の中核を占める土器の欠除は説明出来ない。しかもその中核をなす器形は、久方貝塚第二類土器の前後に位置する安行Ⅱ式及姥山Ⅱ式との間で、極めて円滑な変遷をたどるものであることを考えればなおさらのことである。

以上のような点は、久方貝塚第二類土器が土器型式として単独で存在する可能性の少いことを示すものと筆者は考える。おそらくこの第二類土器の大部分は安行Ⅱ式土器の中に含めてとりあつかうべきものであろう。久方貝塚出土の土器は、量的に必らずしも充分であるとはいえず、又遺跡における層位的関係も不明なものであり、これ以上立ち入った分析を行うにふさわしくない。この点に関してはいずれ良好な資料に基いての十分な検討を行いたい。⁽²³⁾

(2) 第三及第四類土器について、

第三類土器は本貝塚において最も多量に出土した晩期土器であるが、これが筆者の云う姥山Ⅱ式に相当することは改めて云うまでもない。その内容は、姥山遺跡・多古田遺跡など近傍の同時期の遺跡出土例と対比した場合極めてよく一致するものである。姥山Ⅱ式土器の組成を検討すると、その中に多少地域的なずれを反映するものが存在していることは先にふれたが、多古田・久方・姥山と九十九里沿岸に存在するものの中では、そのようなずれがほとんどみられない。これは極めて当然のことと云えるかも知れない。

第四類土器すなわち姥山Ⅲ式土器は、極めてわずかしら検出されなかつた。姥山Ⅲ式とは別個の土器型式とする筆者の見

解に対して、早川智明、戸沢充則氏等から批判的な見解がよせられている。⁽²⁴⁾ それらの批判は、姥山Ⅱ式とⅢ式が明確な層位による分離ではないことに基くものと考えられる。この点は筆者もその当初から型式的な分類であることを明示しておいたし、層位的に両者の分離を可能とする実例を持たないことも述べておいたので、かかる批判の寄せられることは遠からず予期していた問題であつた。本貝塚より出土した姥山Ⅲ式土器は、そのような問題を検討するだけの十分な内容を持つものとは云い難く、又姥山Ⅲ式そのものに対する知見も、かつて筆者の見解を示した以後、さしたる増加がみられない。従つてこの問題は、より良好な資料に接した将来に検討をゆだね、今回は特に触れないでおこうと思う。⁽²⁵⁾

(3) 第五類土器について

第五類として一括した土器は前浦式土器として、最近の晩期土器の中でも特に注目されて来たものである。この前浦式土器に関して、その編年上の位置・土器組成の内容等について今日二つの見解が示されている。その一つは前浦式は安行Ⅲ式と組合さつて、一時期を劃し、それに関係する大洞系土器は大洞c₁式であるとする「杉田Ⅰ」ないしは「天神前Ⅲ」としてまとめる見解であり、⁽²⁶⁾ 他は前浦式と安行Ⅲ式とは相互に別個の独立した型式であり、前浦式に關係する大洞系土器は大洞c₂式であるとするものである。⁽²⁷⁾ 前者のような見解に対しては、以前にいくつかの疑問点を提出したことがある。それを改めて示せば、

① 安行Ⅲ式と前浦式は、相互に異つたいくつかの器形変化を有

しており、それは単一な土器型式内における変化ではなく、むしろそれと異つた土器型式における器形変化として捉えるべきものであること。

② 安行Ⅲ式と前浦式にみられる文様表出技法・文様要素は、すり消し縄文手法の有無といった点からも知られるように極めて対象的である。かかる両者が同一な土器型式を構成することは、型式学的に不自然である。

と云う二点であつた。その結果両型式は東西両関東地方における併行型式として存在する可能性はあるとしても、土器型式としてはやはり本来別個のものとして扱うべきではないかとした。そしてさらに前浦式土器の組成内容を検討するにあつて、「杉田Ⅱ」としてまとめられたものの大部分が精製の浅鉢形土器によつて占められ、関東地方後・晩期縄文土器に通有な粗製の深鉢形土器を欠除している点からみて、「杉田Ⅱ」はある土器型式の中の組成の一部を占めるものではないかと考え、前浦式土器が、深鉢形・鉢形・台付土器などには比較的好例が多いにもかかわらず、浅鉢形土器がめだつて少いという特徴ある組成内容を一般的に示すことを指摘し、「杉田Ⅱ」に特徴的に存在する大洞 c_2 式の浅鉢形土器は、実は前浦式に少い所の浅鉢形土器に充当するものである。換言すれば「杉田Ⅱ」と前浦式は、両者相互に組合さつて一つの土器型式を構成するもので、これが前浦式土器の実体であろうとした。⁽²⁸⁾

この結果、前浦式土器はそれ自身の中に大洞 c_2 式の浅鉢形土器を含むことから明らかなように、大洞 c_2 式対比の土器型式として捉え

られることになり、先の「杉田Ⅰ」「天神前Ⅲ」大洞 c_1 式対比の土器型式とする見解よりも一時期新しいものとみられるに至つた。筆者がかかる見解をとるに至るには、前浦式・安行Ⅲ式、杉田Ⅱ(杉田 c 類)三者の型式学的な研究を一つの基礎としていたのだが、それ以外にも筆者の見解の傍証となり得るいくつかの事例を當時持つていた。それらをいま列举してみると以下の如くである。

① 千葉県八日市場市多古田遺跡における前浦式と大洞 c_2 式の關係が、先に示したような組合せを有していること。

② 前浦式土器の中には燃糸文の施された土器が少量ではあるが存在していること。

③ 千葉県姥山遺跡において、姥山Ⅱ式の主体包含層たる混土貝層中から、大洞 c_1 式土器はいくつか検出されたが、前浦式土器はみられないこと。

④ 姥山遺跡・多古田遺跡・荒海貝塚その他前浦式を豊富に出土した遺跡からは、安行Ⅲ式がほとんど出土しないか、出土しても痕跡的な存在しか示していないこと。

これらを順に詳しくのべれば、①の多古田遺跡からは、極めて多量の前浦式土器の他、姥山Ⅱ式・同Ⅲ式、安行Ⅲ式・安行Ⅱ式、大洞B式、同B-C式・同 c_1 式・同 c_2 式が出土した。この中で注目されるのは、最も新しい大洞式土器が c_2 式であることと、そのほとんどが(三個の完形土器を含む)「杉田Ⅱ」のような浅鉢形土器であり、前浦式には反対に浅鉢形土器が少いという点であろう。少くとも前浦式が、姥山Ⅱ式、同Ⅲ式よりも時期的に降るものであるこ

とは後述する③によつても明らかである。換言すれば前浦式土器は多古田遺跡において最も新しい関東土着の土器である。これに對し大洞系精製土器にあつて、最も降るものは大洞 c_2 式である。大洞 c_1 式は③の姥山例その他からみて、姥山Ⅱ式、同Ⅲ式といった前浦式よりも古い関東土着の土器に關係する場合が考えられる。してみると大洞 c_1 式は一部において前浦式と關係を持つた場合があつたとしても、他方ではより古い土器と關係した場合も考えねばならぬ。従つて、多古田遺跡において関東土着の土器として最も新しい前浦式と、大洞系土器で最も新しい c_2 式とを組合せて考えるのは合理的な処置といえよう。しかも前浦式には浅鉢形土器が少く、大洞 c_2 式のはほとんどは浅鉢形土器に集中すると云う、両者の組成上の欠脱も、両者を組合せることによつて解消し得るのである。先にも触れたように、本久方貝塚からは、前浦式土器の他に大洞 c_2 式土器が出土したが、その大洞 c_2 式土器は、筆者の以上のような見解と全く一致するうるしぬりの浅鉢形土器口辺部破片であつた。これらの事例は、単なる偶然の伴出とは考えられぬもので、前浦式と大洞 c_2 式の必然的な關係を示すものと筆者にはうけとれるのである。

②の燃糸文土器についてみると、我々は多古田遺跡の前浦式土器の内に、本来は縄文が施さるべき部分に燃糸文が施文されている例や、燃糸の施文された小形土器及粗製土器胴部破片等々が少量存在する事実を知つていた。燃糸文が関東地方晩期縄文土器にあらわれる時期は、地域によつて多少異り、北関東地方が比較的早く大洞 c_1 、 c_2 式ごろ、南関東では千網式併行の時期になつて出現するとみる

のが従来の見解であつた。⁽²⁹⁾今問題となる南関東に關していえば、從來安行Ⅲ諸型式にはほとんど認められず、大洞A式に相當する「杉田Ⅲ」「姥山V式」「荒海貝塚第二類a種・b種土器」に伴う粗製土器にいたつて盛行するとみられる。従つて、前浦式土器の中に燃糸文を有するものが少量ではあるが検出されることは、前浦式が安行Ⅲ諸型式よりもさらに大洞A式併行の時期に接近した所産であること、換言すれば安行Ⅲ諸型式と大洞A式併行期の間位置するものである可能性を示すものと筆者は推定したのである。その後天神前遺跡においても燃糸文のある前浦式土器が検出され、⁽³⁰⁾又発表の自由を持たぬ二、三の遺跡においても、前浦式土器と燃糸文土器の關係が密接である事例に接することが出来た。又本久方貝塚からは燃糸文を持つており返し口辺の深鉢形土器が出土している。これもすでにくり返し述べて来たように、単なる偶然の一致ではなく、燃糸文土器と前浦式土器の必然的な一致を示すものとして筆者には理解出来るのである。本貝塚の土器を分類記述するにあつて、大洞 c_2 式と燃糸文土器を前浦式土器の中に一括して扱つた根拠は、この辺にある。⁽³¹⁾

③の問題についていえば、大洞 c_1 式に關係する関東の土器型式が、必らずしも前浦式とのみ限定されるものでなく、前浦式よりもより古いと考えられる土器型式に随伴した実例を我々はいくつか知つているということである。たとえば、姥山遺跡の姥山Ⅱ式を主体とする混土貝層中より、完形一個を含む三個体以上の大洞 c_1 式土器を検出した。最近の例では姥山Ⅱ式・Ⅲ式を包含する土層(前浦式

は存在しない)より、やはり大洞 c_1 式の破片がかなり検出されている加曾利貝塚での所見もある。この他早川智明氏の調査において、姥山Ⅱ式、同Ⅲ式を出土する場合、大洞 c_1 式が随伴するケースがあると聞いている。³²⁾要するに姥山Ⅱ式かⅢ式か、明確な所はなお精査を要するとしても、これら前浦式よりも古いとみられる土器型式に大洞 c_1 式が関係する場合の少なからざることが知られるのである。しかも先の姥山遺跡の混土貝層中には、前浦式はほとんど包含されておらず、前浦式はもはや貝層以外の、それよりも上位にある包含層から出土しているのであつて、大洞 c_2 式土器の出土のしかたも、これと対応するものであることはいうまでもない。以上からみて前浦式と大洞 c_1 式との関係は、あるいくつかの文様の中に類似する要素のあることは認められるけれども、その結びつきかたは前浦式と大洞 c_2 式の方がより緊密であると考えられるのであつて、これらも又筆者の傍証の一つとなつていた。

④の問題も前浦式土器の性格を考える上で重要である。多古田遺跡・姥山遺跡など我々が調査した前浦式土器を多く出土する遺跡からは、少くとも杉田A類のような安行Ⅲ式はほとんど存在しない。ことに姥山遺跡では、過去四次にわたる調査の結果であり、これは確定的な事実とみられよう。この他荒海貝塚・天神前遺跡等においては安行Ⅲ式が出土したが、その量は前浦式にくらべかなり減少していると云われる。このように、前浦式と安行Ⅲ式はいつも相伴つて出土するとは限らず、又両者が出土する場合にあつても、必ずしも同一な出土のしかたを示すとは限らない。現実には、前浦式と

安行Ⅲ式の両者を出土する遺跡は存在するけれども、それと両者が本質的に同一な土器型式を構成するか否かは別個の問題と云えるだろう。特にいくつかの前浦式を多量に出土した遺跡において、安行Ⅲ式がみとめ難いという事実は重要で、これも又両者が相互に独立した存在であることを示す傍証として筆者は理解するのである。

筆者が前浦式は大洞 c_2 式と関係する土器型式であり、安行Ⅲ式とは別個の土器型式であるとする根拠は以上のような点にあるが、かかる筆者の見解は、いくつかの新事例の発見、報告に接した今日も大きく変更する必要を認めないばかりか、天神前遺跡、久方貝塚などで明らかになつた事実は、むしろ上記の筆者の見解によく合致するものと云える。前浦式土器については、これらの他にもその前後に位置する土器型式との型式学的な関連、分布といった土器型式における基本的な問題が未解決のまま残されており、前浦式についてのより正確な認識を我々が得るまでには、なお多くの検討を必要とすることは明らかであるが、以上述べた点から、前浦式土器のいくつかの特性を明らかにすることが出来たと思う。

五 結 語

以上千葉県八日市場市吉田地区久方にある久方貝塚C地点出土の晩期縄文土器の概略を記し、そこから生じた二、三の問題をとりあげて来たが、それらを要約すると次のようになる。

- (1) 第一類土器としたものは従来の安行Ⅱ式に相当するもので、その組成内容は多古田遺跡・姥山遺跡における同期資料とよ

く一致するものである。

- (2) 第二类土器としたものは従来の安行Ⅲ式³的な内容を持つものであるが、器形の多くは小形であり、又個々の文様にかなり個性がつよく、統一性が少い。この点からみて、第二类土器は第一類土器に含めて考えるべきではないかと思われるが、出土量も充分でなくその最終的検討は将来にゆだねたい。
- (3) 第三類土器としたものは、筆者のいう姥山Ⅱ式に相当するもので、その内容は姥山遺跡・多古田遺跡出土資料とよく一致する。

- (4) 第四類土器としたものは、筆者のいう姥山Ⅲ式に相当するものであるが、その出土例は極めて少く、充分な検討が行えない。この様な点から、姥山Ⅲ式についてよせられたいくつかの批判を今回は特にとりあげなかつた。

- (5) 第五類土器としたものは前浦式土器に相当するものである。出土例は少く、全部で約廿個体ていどであつたが、大洞^{c2}式土器・燃糸文土器なども存在しており注目された。これらのものが前浦式土器の中に入れて考えねばならないことは、本稿に示したいくつかの論拠により明らかにされたと信ずる。
- (6) 第六類として一括したものは、筆者として十分な検討が今日行えない。今後の資料の増加をまつて考えることにしたいが、大方の御教示をお願いする次第である。

久方貝塚の調査によつて、我々は関東地方東南部の晩期縄文土器について、さらにいくつかの新しい認識を得ることが出来た。就

中前浦式土器については、筆者等の抱いていた予測を、ほど裏書きするような事実には接し得たことは幸いであつた。前浦式土器は山内博士の茨城県前浦遺跡の調査によつて初めてとりあげられ、西村教授の荒海貝塚の調査によつてさらにその内容が具体化された。しかし乍ら、その所屬時期については多少意見の相違もみられ、土器型式の内容、前後の土器型式との関連・中心分布地域の確認といった土器型式研究上の基礎がいまだ明確にされ難い点も残されている。筆者は前段に於いて詳論したように、前浦式土器は安行Ⅲ式とは別個のもので、いくつかの点からみて大洞^{c2}式対比の土器型式であるとするのだが、前浦式土器の性格を分析する上で一つの重要な問題となり得るものに、安行Ⅲ式の分布と前浦式土器の分布が、いかに関係しあうものかを検討する必要があると思う。筆者は前章④において安行Ⅲ式と前浦式の両方を共に出土する遺跡があるが、前浦式を多く出土した遺跡においては安行Ⅲ式の存在が微弱である傾向を指摘しておいた。この様な両者の関係は、縦の時間的な関係のみではなく、両者の空間的關係をも考慮に入れて検討する必要のあることを示唆するものと解せられる。

現在前浦式土器を出土した遺跡は、筆者の確認し得たもので約二十ヶ所以上を数えるがその内の過半数以上が関東地方東南部に集中しており、特に利根川下流―下総台地一帯に濃密な分布を示している。そしてこれらの地域には、多古田・姥山・荒海・花輪・天神前など、多量の前浦式土器を出土した遺跡が存在し、安行Ⅲ式はこれらの遺跡では反対に、ほとんど存在しないか、存在してもその量は

前浦式にくらべて著るしく減少する傾向を示している。これに対して安行Ⅲ式が濃密に分布するといわれる関東地方西南部のいくつかの遺跡、たとえば埼玉県奈瀬戸遺跡、神奈川県杉田・桂台遺跡・東京都目黒東山遺跡などにおいては、多量の安行Ⅲ式に対して、前浦式土器が減少する傾向が認められる云われている。してみると奥東京湾付近を境として、前浦式と安行Ⅲ式の出土比率が反対になることになつて、これは両者の中心分布地域のずれを反映するものと受けとれるようである。西村教授はすでに早くから前浦式土器は関東地方東南部に分布する地方型式であると云われていたが、かかる事實は今後のよりめんみつな分布調査によつて検討されねばならぬといとしても、我々が知り得た事実の多くは、この西村教授の予見をうらがきするようである。⁽³³⁾

関東地方における縄文土器が、その東部と西部に於いてかなり異つた様相を示す場合のあつたことは、晩期以前でも前期末と中期前半などの例からみて明らかである。もし以上述べて来たことが妥当性のあるものとするならば、晩期中葉における東西の様相のちがいは、かなり顕著であつたといえる。そしてそれが大洞A式併行期になると、そのような相異は、もはや精製土器においてはほとんど影をひそめ、粗製土器の相異しか示さなくなると云う事が明らかであるだけに、より一層重視する必要がある。ともかく、安行Ⅲ式と前浦式の分布を検討して行くと、両者は南関東西部と東部に、それぞれ分布の中心をおくものであると推定されて来るが、そうすると安行Ⅲ式土器の一部は大洞C₂式に併行する型式として捉えられる可能

千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて

性が生じることになる。最近奈良瀬戸遺跡の調査に参加した国学院大学考古学研究会では、奈良瀬戸遺跡の安行Ⅲ式を二分し、その新しい部分は大洞C₂式に併行するものとされ、又山内博士も最近の著作において大洞C₂式に対比する安行Ⅲ式土器を「安行Ⅲ式」なる新名称を付して発表された。⁽³⁵⁾ この他早川智明氏は、すでに杉田遺跡の調査が行われていた当時から、安行Ⅲ式の一部は大洞C₂式に対比すべきものと考えられていたようである。最近の早川氏の諸著作にもこの点が示されている。⁽³⁶⁾ 以上のように従来大洞C₁式に関係すると規定されていた安行Ⅲ式土器の一部を分離して、大洞C₂式対比の型式として捉えようとする意見が著るしくなつて来た。筆者にとつては、それが認められるならば、安行Ⅲ式と前浦式の間を、さらに円滑に説明し得るものとなるので、興味ある課題と考えている。けれどもその問題はあくまで安行Ⅲ式自身の分析によつて決せらるべきもので、前浦式との関係いかによつて決定すべき問題ではないように思われる。安行Ⅲ式にせよ、安行Ⅲ式にせよ、その細分基準、内容はいまだ十分明らかにされてはいないし、又両者の考え方それぞれ細かな異同もよく知られてはいない。従つて筆者は安行Ⅲ式の一部が大洞C₂式対比の土器型式として規定されうる可能性は、前浦式の分析を通じてかなりあるものとみているが、なお安行Ⅲ式自身の検討が明確になるまで結論を保留しておこうと思う。そしてその結果のいかんにかかわらず、前浦式土器が、関東地方東南部を中心に分布し、それに関係する主たる大洞系土器は大洞C₂式であろうとする予測は、現在の我々が持つ諸事実からみてほぼ確実であると考

えたい。

〔註〕

- (1) 多古町公民館石井氏の御教示による。
- (2) 清水潤三 「千葉県栗山川溪谷における貝塚の地域的研
究(予報)」史学卅一卷一、四号 清水潤三、近森正 「千
葉県八日市場市宿井下貝塚の調査」史学卅二卷二号
- (3) 清水潤三 「前掲論文」
- (4) 清水潤三 「前掲論文」
- (5) 清水潤三 「前掲論文」 慶応義塾高等学校歴史研究会
「千葉県八日市場市大浦貝塚報告」Anchaeology 廿七号
- (6) 清水潤三 「前掲論文」
- (7) 清水潤三 「前掲論文」 慶応義塾高校歴史研究会
「千葉県山武郡横芝町木戸台貝塚報告」Anchaeology 廿
七号
- (8) 清水潤三 「前掲論文」
- (9) 清水潤三 「前掲論文」 拙稿 「千葉県山武郡横芝町
姥山、山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」史学卅六卷
一号
- (10) 甲野勇 「埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告」(史前学
会小報2) 及び筆者採集資料。
- (11) 竹下次作氏の御教示による。
- (12) 三友国五郎・安岡路洋・早川智明「井沼遺跡」(埼玉県
立文化会館)
- (13) この菱状のすり消し文様を、かつて筆者は稻妻状文と呼
んだことがある。早川智明氏はこれを菱形縄文と呼ばれ
た。(早川智明「大宮市奈良瀬戸出土の土器」埼玉考古
第二号)筆者のこの文様に関する呼び名は必ずしも適切
なものと考えてはいなかったし、早川氏の見解が適当と思
われるので、今後は早川氏の文様称呼を用いることにした
い。
- (14) 前掲拙稿及拙稿「姥山Ⅱ式土器に関する二、三の問題」
史学卅七卷一号
- (15) 前掲拙稿
- (16) 拙稿 「千葉県山武郡横芝町姥山、山武姥山貝塚の晩期
縄文土器に就いて」史学卅六卷一号
- (17) 拙稿「土器型式の認定方法としてのセットの意義」考
古学手帖 廿一号
- (18) (9)の拙稿参照。
- (19) 拙稿「姥山式土器に関する二、三の問題」史学卅七卷
一号
- (20) 早稲田大学高等学院歴史研究部「千葉県香取郡奈土貝塚
発掘報告書」
- (21) (12)参照。
- (22) 杉原莊介・大塚初重・戸沢充則・小林三郎 「千葉県天
神前遺跡における晩期縄文式土器」駿台史学第十五号
- (23) このように安行Ⅲ式^a的特徴を持った一群を、安行Ⅱ式

の中に含ませてしまうと、安行Ⅱ式には、かかるⅢ式的な文様を持つ土器が伴わない実例もあるとして、安行Ⅲ式的な文様ある土器の伴出の有無によつて、安行Ⅱ式を二分する考え方も生じると思われる。この様な場合でもその細分基準の中心となるものは、筆者が安行系土器の中で中核を占めると考えている波状縁の深鉢形土器、平縁の帯縄文深鉢形土器に求める必要がある。

(24) (13) 所引の早川氏報文及(22)所引の杉原莊介氏等の論考を参照されたい。

(25) 姥山Ⅲ式が同Ⅱ式と層位的に分離出来ないが、土器型式としては分離して考えられるものとした点については、

(17) 所引の拙稿に、やや詳しく述べておいた。

(26) 杉原莊介・戸沢充則「神奈川県杉田および桂台遺跡の研究」考古学集刊二巻一号、及(22)所引文献を参照されたい。

(27) 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚」古代第卅六号 拙稿「書評」神奈川県杉田および桂台遺跡の研究」あるかい
あ第三号

(28) (27) 所引拙稿を参照されたい。

(29) 埜静夫「北関東に於ける縄文土器の編年学的研究」および埜氏の御教示による。

(30) (22) に同じ。

(31) しかし乍ら、前浦式土器に伴う撚糸文土器は、量的には

千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて

決して多くなく、それを以て前浦式土器における主体的な粗製土器とはみなせないと考えている。前浦式の粗製土器は、おそらく本稿でとりあげた第五類(a)ないし(b)に求められるとみたい。

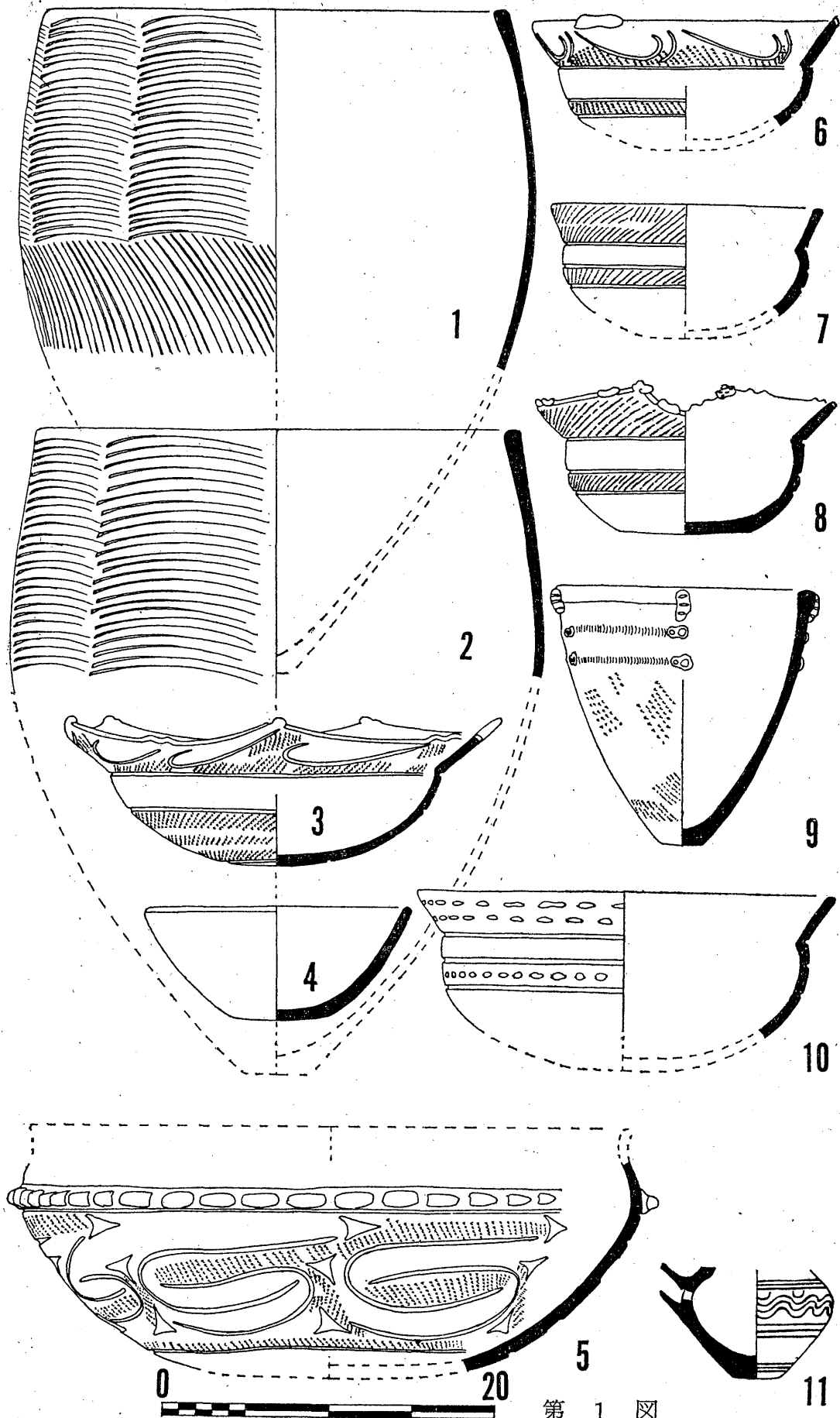
(32) 早川智明「晩期の土偶一例」埼玉研究第八号、同「大宮市奈良瀬戸出土の土器」埼玉考古第二号、なお早川氏からもその点に関する御教示を得た。

(33) 早稲田大学考古学研究会編「千葉県荒海貝塚第二次発掘調査概報」金鈴第十五号。

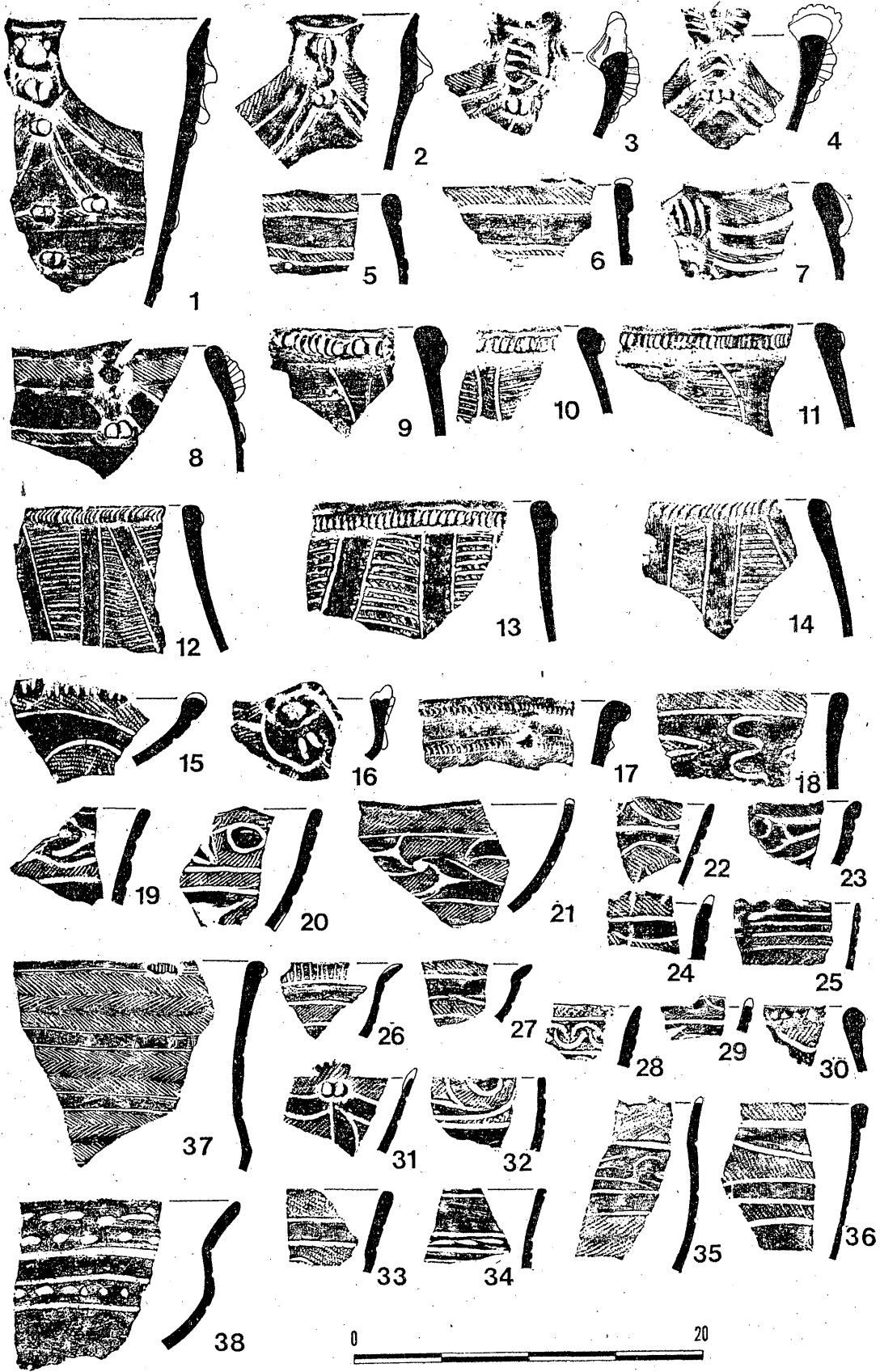
(34) 国学院大学考古学会「埼玉県大宮市奈良瀬戸遺跡展」若木考古第六十八号及同号付録「奈良瀬戸遺跡に於ける安行3c式の確立とその移行」

(35) 山内清男「縄文式土器・総論」日本原始美術Ⅰ所収

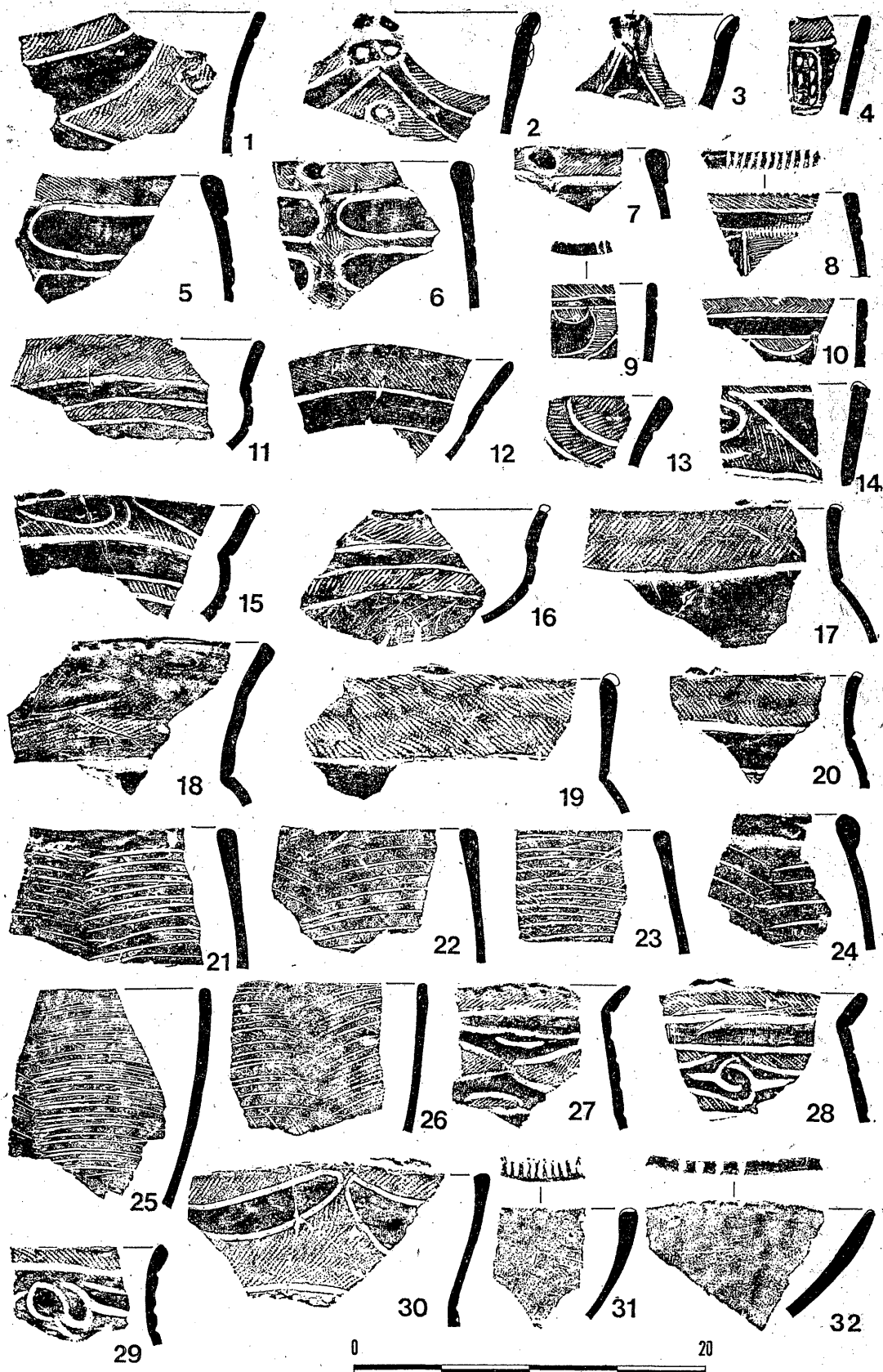
(36) (32) 所引の早川氏関係論文を参照されたい。



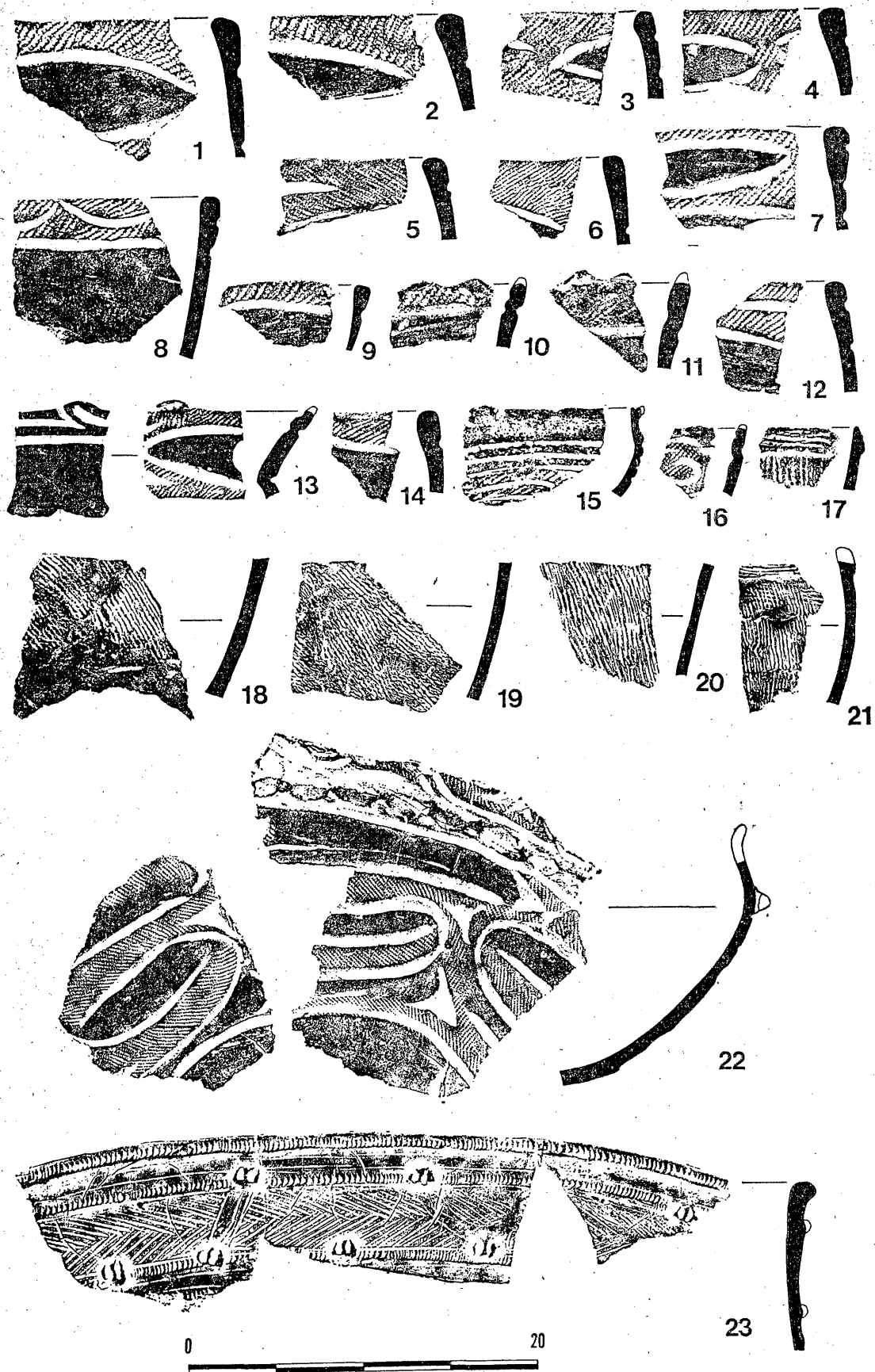
第 1 图



第 2 図



第 3 图



第 4 図